

(西暦) 2019 年度 博士前期課程学位論文要旨

学位論文題名 (注: 学位論文題名が英語の場合は和訳をつけること)

家族を超えたゆるいくつながり>—コレクティブハウスを通じてケアを再考する—

学位の種類: 修士 (看護学)

首都大学東京大学院

人間健康科学研究科 博士前期課程 人間健康科学専攻 看護科学域

学修番号 18894709

氏名: 宮武 綾音

(指導教員名: 野村 亜由美 准教授)

注: 1 ページあたり 1,000 字程度 (英語の場合 300 ワード程度) で、本様式 1~2 ページ (A4 版) 程度とする。

研究背景: 現代社会は単身世帯が増加し、核家族から「個」の時代へと編成している。また、社会保障や福祉サービスの充実、インターネットの普及や発展などにより、お互いに名指すことができる人と付き合う必然性は低下した。匿名性の高い個人として生きられる時代となったことにより、顔の見える相互的な関係性と配慮によって固有の生を認め合うような<つながり>が希薄化している。かつて家族や地域で行っていたケアは、このような社会において個人や家族だけで担うことは難しくなっている。しかし、ケアとは共同かつ協働的に行われるものである。<つながり>が希薄化している現代社会において、ケアをめぐる<つながり>がいかにして形成されていくかということが重要となってくる。

目的・方法: これらの背景をもとに、本研究は複数の世代により主体的に形成されるコレクティブハウスの生活を通じて、居住者同士がいかにして<つながり>を作っているのかを明らかにする。また、その中でお互いがどのようにしてケアしあっているのかを明らかにし、<つながり>が希薄化している現代社会におけるケアを再考することを目的とした。本研究の研究デザインはエスノグラフィーを用いた質的記述的研究である。筆者はコレクティブハウス A に 3 ヶ月間入居し、居住者らと食事や掃除などの日常生活を共にしながら参与観察を行った。

考察: コレクティブハウスの<つながり>は、「家族」という枠にとらわれないゆるやかな関係性の中で、固有の生を持つ個と個が「場」と「時間」を共有しながら、相互交流を通じて作られていた。その<つながり>の中で情緒的な関係性を築き、お互いが日常の暮らしから他者の生活様式や価値観など「人となり」を理解し、相手を気づかうケアが生まれていた。一方、<つながり>のある中で、私たちは現代社会において自明のこととされている個の「自律」を期待していたり、個別性を度外視した「平等」を求めたりする。しかし、人間は生まれながらにして個別具体的な存在として差異があり、他者と呼応しながら生きている。コレクティブハウスでは血縁や地縁ではない者同士が互いの差異を認め合い、他者と共に生きながら呼応的關係性を築きケアしあっていた。

結論: 本研究はコレクティブハウスを通して<つながり>とケアについて再考した。コレクティブハウスのようなゆるいくつながり>は、家族や世帯を超えて、情動的・呼応的な関係性を築きながら他者をケアすることを可能とする。